

イギリスにおけるステューディオ教育 ユニットシステムという選択制の建築家教育

連
健
夫
建築教育研究家
主宰



むらじけお
1956年京都府生まれ/多摩美術大学卒業/東京都立大学大学院修了/AAスクール大学院修了/AAスクール助手を経て1986年帰国/著書に『イギリス色の街』ほか、作品に『P&C』『ツリハウス』ほか

イギリスの建築教育の歴史的視点と概要は、本誌ですでに紹介されているため、ここでは最近、とくに採用されているユニットシステムを、学生および教師として91年から96年にかけて薄英した視点*からイギリスのステューディオ教育について概説を試みたい。

設計教育を中心とした建築家教育

イギリスの大学の建築教育は、基本的に建築家教育であり、設計教育を中心に各教科がそれを支える形のカリキュラムが組まれている。設計に費やす時数は概ね3分の2に相当する。教科は概ね各大学とも技術系教科として構造、材料、環境、エネルギー関係を扱い、一般教科として歴史や理論、心理、哲学関係を設けている*。大学によっては、CADやドローイング、写真などの表現方法を扱った科目も用意されている。進級には設計はもちろん、これら教科の履修が条件となっている。卒業にあたっては、設計に加え各大学とも7,500~10,000ワードの論文が義務づけられており、多くは、設計のプロジェクトに関係したテーマを扱っている。建築学部は5年制であり、ほかの学部の大学教育が3年であるため、大学では3年修了時にBSC (Bachelor of Science) を取得し、5年修了時に建築のディプロマ (Architectural Diploma) を取得することになる。RIBAとの関係では、3年生修了時にRIBAのパート1を取得し、1年間の実務経験を得たのち、大学に戻り4~5年生を過ごし、ディプロマの試験と併せてパート2の試験を受ける。その後、1年間の実務経験を経たのち、パート3の試験に合格して建築家として登録することになる。学生によっては、続けて5年間大学で過ごし、卒業後、まとめて2年間の実務を積んで受験する者もある。登録はARCUK (Architectural Registration Council of UK) で行い、希望者がRIBAの会員となる。

増えてきたユニットシステム

イギリスのステューディオ教育として注目されるものに、ユニットシステムがある。これは、従来の一学年の学生が皆同じ課題に取り組むというイヤーズシステムに替わり、ユニットと呼ばれるスタジオ・研究室において、各ユニットごとに独自の方法で建築家教育を行うやり方である。最近これを採用する大学が増えてきている。AAスクール (以下AA) が1971年に最初に採用し、次に東ロンドン大学 (以下東ロンドン) が1982年、そしてロンドン大学パートレット校 (以下パートレット) が1990年に採用し、その後、

ほかの大学の採用が続き、今ではRIBA認定校42校中、9校がユニットシステムである*。

ユニットシステムの採用動機

この背景には、学生の多様化、個性化に 대응すること、大学の生き残り策として特徴ある教育を行う必要性が高まったこと、建築の意味の多様性などが挙げられる。AAでは、当時、多様な建築を追求することの必要性という教育的理由と、独立校としての独自性を打ち出し、多くの学生を集めるという経営的背景から、学長A. ボヤスキーによってユニットシステムが整備された。東ロンドンでは、導入以前に実施していた学期単位でのユニット制が学生に好評であったため、学部長C. ホーレイを機に全面的な導入に踏み切った。パートレットでは、当時ディグリーコース (1~3年) からAAのディプロマ (4~5年) に学生が流れる現象があり、これを阻止する経営的理由からP. クックを学部長として招き、ユニットシステムを採用した。追従したほかの学校も、建築家による独自のプログラムで教育を受けられること、学生が希望ユニットを自由に選択することが出来る利点から採用に踏み切っている。

ユニットシステムの特徴

各ユニットは、教師が1~2人、学生が15人程度で構成されており、担当教師に任された1年間の教育プログラムで建築教育が行われる。ユニットは、一部複数学年で、AAの例では1年生に4つ、2~3年生に9つ、4~5年生に12、用意されている*。高学年に数が多いのは、留学生を含む編入の学生数が加わるからである。各ユニットは、学年始めに1年間のプログラムを発表し、学生は気に入ったユニットの面接を受け、担当教師が了承すればそのユニットの学生となる。面接では、各自のポートフォリオ (作品集) を持参して質疑を受けるが、学生はこのために、質の高いポートフォリオを作らうとする。

一方、ユニット制も良い学生を集めるため、教育プログラムを工夫するという相乗効果がある。したがって、学生のみならずユニット間の競争があり、人気の無いユニットは消滅する。ちなみに、91年~95年のユニットの入替えを見てみると、3校の平均で、毎年約4分の1のユニットが消え、新しいユニットに替わっている。これでは、教師は落ち着かないと思われるが、多くの教師は外に事務所を持つ建築家である。そうでなくとも、2~3の大学と掛け持ちで教えているケースが多く、各教師も収入が全く無くなる事態を避けている。日本の大学でいえば、非常勤講師にあたるが、待遇は概して良い。これは、結果として、教師間の競争効果のみならず大学間の交流、大学と外とのつながりを強くすることになる。一方、この逆にどのユニットからもOKが出なかった学生も生じうる。この場合、事務局が調整するが、下の学年のユニットに入れられるケースさえある。この競争と厳しさがユニットと学生の質を上げることになる。日本の学生に比較して、彼らが大人に見えるのも無理がないように思える。

ユニットの教育プログラム

このように、各ユニットごとに特徴あるプログラムを工夫しているわけであるが、その指導方法には共通点があり、ゼミ (ユニットミーティング) と個人指導 (チュートリアル) と講評会 (ジ



写真1 ゼミ（ユニット全体でのミーティング）は、ユニットルームのほかコモンスペースなどでも行われる（東ロンドン）



写真2 個人指導は、ユニットルームで時間を決めて行われる（AA：右から学生、C.フライス、著者）



写真3 講評会はプロジェクトの途中で外部からも講評者を招いて行われる（パートレット）

ユリー）で設計教育が行われている。

ゼミ（写真1）は、教師があるテーマで話をしたり、議論をする場である。頻度にはばらつきはあるが、平均では月に1〜2回程度行っている。学生へのプログラム導入過程の意味合いから1学期に頻繁にゼミを行う傾向が見られる。

個人指導（写真2）は、教師と学生が1対1で行われる指導で、おもに各学生のプロジェクトについて話し合われる。20分程度で週に1〜2回行われる。教師の指定する時間帯に学生から予約するので、教師の生活ペースをさほど乱すわけではない。

講評会（写真3）は、各学生がプロジェクトを発表し、講評を受ける場である。ほかのユニットや外部から講評者を招くケースが多く、結果、ユニットの教育プログラムに客観的な視点が加わる。頻度は学期に1〜4回と様々であるが、プロジェクトの途中段階で行われることに特徴があり、これにより学生は修正をすることが出来る。したがって、学生はプロジェクトのプロセスを表現した図面を講評会の機会ごとにまとめることとなり、最終的には何十枚ものポートフォリオが出来上がる。

これ以外に、ユニットトリップと称して、研修旅行のプログラムがある。この多くが異文化に触れることを目的に海外を行先としている。内容は、訪問見学のほか、デザインの課題を与えるもの、現地の学校と協同ワークショップをするもの、などバラエティーに富んでいる。

施設・学習スペース

雑誌などでたびたび、AAが製図室の無い学校として紹介されるが、ユニットシステムを持つ学校では、前述した学習内容から、特に製図室を必要としない。各学生のプロジェクトの制作は自宅で行い、大学内ではユニットのゼミ+個人指導+講評会を行えば、設計の授業はこと足り。これに加えて、教科の授業のための講義室があれば成立する。したがって、必要施設構成は、ユニットルーム（スタジオ）、大小の講義室、表現技術を学ぶ、ワークショップ（工房）、CAD室、写真室などである。ワークショップは、金工、木工などの製作を行う工房であり、どの建築学校も立派なものが用意されており、常駐の指導者がいるのが特徴である。これ以外に、展示室、図書室、スライド資料室、バー、食堂などが配されている。その部屋の合計面積を見ると、AAで25ユニットに対して約2,000m²つまり1ユニットあたり約80m²程度にすぎない*。各ユニットルームは、AAで平均15m²であり、おもにミーティングルームとして使われている。東ロンドンでは平均68m²と広く、学生の製図台が置かれているが、全員が制作をここでしているわけではない。パートレットは、平均46m²程度の広さであり、同様、製図台は置かれているが全員の数はない。

つまり、ユニットルームの役割が、ゼミ、個人指導、講評会であり、制作は二次的役割である。個人のプロジェクトの制作は自宅やワークショップ、CAD室などで行われるのが、ユニットシステムの一つの特徴とも言える。

一斉進度学習の建築技術者教育と個人学習の選択制建築家教育

日本の多くの大学の建築教育は、一斉進度学習的な教育であり、ある一定レベルの建築技術者を育てるという、近代建築教育の目的を果たしているように思える。一方、イギリスのステューディオ教育は個人指導を基本とし、学生がその目的・希望に合ったプログラムを選択するという個人学習の選択制建築家教育という感じがある。スキルを大切に建築技術者教育と、創造性を開拓することに重きを置いた建築家教育との根本的な違いがあるが、より多様になる学生のニーズに大学側が適切なサービスをする必要については同様で、選択制（メニュー方式）の視点が大切になっていくことは異論がなからう。設計教育に力点が置かれたステューディオ教育が、教師の大きな負担になるような誤解とも思えるイメージがあるが、実際は、スタジオに教師がべったりと張り付いているのではなく、設計事務所や研究室など教師の日常の場の利用、教師の時間に合わせた指導時間などで過大な負担は無く、個人指導を中心とした建築家教育が非常勤講師との協力のなかで自然に行われている。ただ、学生のみならず教職員の競争や、教育プログラムの切磋琢磨は、日本のそれとは大きな違いがあるように感じる。また、技術教育（スキル）と創造性を開拓する教育（デベロップメント）とのバランスの意識的ギャップは深く、形（システム）だけをとらえても、指導の意識・態度に視点が移らないかぎり、ユニットシステムというステューディオ教育を理解することにはならないと思う。

【①—注—①】

- ★1—91〜93年：AAスクール生活および大学院生、94〜96年：同校助手、東ロンドン大非常勤講師、在英日本大使館技術顧問という立場で専業した。資料は、各大学の学校概要、RIBA登録建築学校リスト、イギリスの設計教育におけるユニットシステムについての考案1〜3（著：田村：96、96年日本建築学会大会学術講演録集）。
- ★2—教科分類として、AAではGeneral Studies, Technical Studies, Media Studies, 東ロンドンではHistory & Theory, Technical Studies, Professional Studies。パートレットではHumanities, Technologyとされている。
- ★3—この3校以外に北ロンドン大、シェフィールド大、サウスバンク大、オックスフォード・ブルックス大、ケンブリッジ大、リンカンシャー大、ハロウサイド大。
- ★4—東ロンドンでは、1年に2つ、2〜3年に7つ、4〜5年に7つのユニット、パートレット校では、1年生は基礎的学習との配慮からユニット制は2年からで2〜3年に5つ、4〜5年に11。
- ★5—東ロンドンで、16ユニットに対して2,490m²で1ユニットあたり155m²、パートレットでは、12ユニットに2,144m²で1ユニットあたり178m²である。